

おしげあちゃんあばよ

製作 桜映画社

全3巻 30分
価格 45,000円

製作意図

わが国の伝染病は、終戦後著しく減少したにもかかわらず、赤痢だけはすこしも減らない。厚生省の実態調査によると、予想以上に多数の保菌者がおり、年間延六〇〇万人そのうち届出患者が約一〇万人いる。

赤痢はその伝染経路が不明であることが多く、「人から人へ」の接触伝染とよばれるものであるところに、蔓延の秘密があるのではなからうか。この映画はそれをねらっている。

この映画は極力説明を省いた。そのために、ある人は疑問を、ある人は不満を持つにちがいない。その意味で、この映画は衛生教育の開巻の役目をさせたいと思う。

映画を見終つたあとで、どうかもう一度、映画の内容について、自分たちの周囲について話しあつてほしい。そこにもこの映画の潜在的なねらいがある。

ストーリー

後家のふんばりのたとえの通り、おしげはいつてつもの。息子庫吉夫婦の間には二人も子供があつて、孫にはいいおばあちゃんでもある。

嫁のお千代はかねてから薄暗い台所を改善したいと思つてゐるし、おしげは孫の将来のためにも家の周囲に石垣をつくつておきたいと考えて対立した。

おしげは実家の兄から石垣をつくるために借金をしてきたが、帰つてくるなり台所の流しが留守中に立ち流しに改造されているのを見て眉をひそめた。「ブリキ屋のカンちゃん」が古トタンくれたんで百円でできたんだ」ととくいそうな庫吉に「でもあの流しは病人の出る方がくだぞ」とはきだすようにいうのだつた。

それかあらぬか、おしげは腹をこわした。石屋で工事を依頼しながらおふだをのんだりするのだが、これもあの流しのせいだと、おしげはふきげんである。

そんなおしげに、さすがくつたくなのい庫吉夫婦も頭をなやまし、ヤブさんこと竹中先生に何とか診察してもらふことはできないのかと相談した。「お前さんとこのバアさんはにがてだよ。医者のことなん

か、てんで受けつけないんだから……」

……といながらも、人のいい竹中先生は一計をあんじて金勘定中のおしげさんをみまつた。

「いや、実は近ごろ透視術を勉強したからおバアちゃんをみてやろう」ともちかけたが、てにのりかかつたおしげに「ははあ、お前、誰かに頼まれて来たな、庫吉かお千代か」と気づかれ、竹中先生はあたふたと逃げ帰つた。

せめて食事だけはおかゆにしようとお千代の心ずくしもむだで、おしげは自分一人の炊事をするほどこじれてしまつた。「秋男、おバアちゃんといつしよに食おう。魚があるよ……」と、孫には目のないおしげは、飯といつしよに赤痢菌（おバアちゃんの腹くだしは赤痢だつた）まで食わしてしまつた。

秋男は発病した。秋男までも……とおしげはおどろき、立ち流しは打ちこわされた。おしげは祈禱師を呼び、庫吉はベロベロに弊つた竹中先生をリヤカーにのせてきた。上の部落で赤痢にかかつた子供が手おくれで死んだそのやりきれなさを竹中先生はうつたえるのだつた。

秋男はあぶないところでもちなお

した。

ほつとしたとき、竹中先生が検便の結果をしらせに来た。「やつぱりもとは川の水かな」という庫吉に、「いや、バアちゃんだ」と竹中先生は断定した。おしげはけしきばんだ。「いや聞いてくれ」と竹中先生は、菌型から推察しておしげが実家から病菌をもつて来たこと、それが秋男の口に入つた経路をいつてきかせた。おしげは一言もなかつた。

おしげと秋男が入院する日、石屋の甚さんはブリブリ怒つていた。「石垣をやめて台所や便所をなおすつたつて、台所なんかには、石屋の仕事はねえや。」

おしげと秋男を乗せた病院の車の窓には、おしげの明るい顔があつた。みおくる庫吉と千代に、いつまでも手を振つてゐるのがみえた。

キャスト

おしげ 庫吉 秋男 石村 竹中先生
お千代 江中 福岡 磯本
あばよ 鈴木 高比 順吉
あばよ 志子 古え 雄子

原案 後藤 八木 青島 山根
脚本 鈴木 大 通 重
監督 八郎 春 耕 視

文部省選定

東京都新宿区角筈2-84

株式会社 桜映画社

TEL(342)5760, 5768~9